

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第35回）議事要旨

1. 日時 令和6年8月28日（水）10:00～12:00
2. 場所 京都ガーデンパレス 2階 『宴会場 葵』
3. 出席者 <委員>

和田座長、泉委員、岡林委員、成瀬委員、銚井委員、森川委員、柳澤秋介委員
(オンライン)小林委員、里中委員、佐野委員、高鳥委員、林部委員、三村委員、
矢島委員、柳澤伊佐男委員

<事務局>

文化庁：山下文化財鑑査官、今泉文化財審議官、塩川文化資源活用課長・古墳
壁画室室長、作田文化資源活用課長補佐、米村古墳壁画対策調査官、
安藤文化財調査官、綿田主任文化財調査官、富岡文化財調査官、横須
賀文化財調査官、青木文化財調査官、大澤文化財調査官、山崎文化資
源活用課事業係長 ほか

(オンライン) 森田次長、三輪文化財第一課長・古墳壁画室副室長、
田中文化財第二課長・古墳壁画室室長補佐 ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：佐藤保存科学研究センター生物科学研究室長、秋山保存環
境研究室長

(オンライン) 犬塚材料調査班長（保存科学研究センターセンター長）、
早川修復材料研究室長（保存科学研究センター副センター長） ほか

奈良文化財研究所：高妻参与、廣瀬飛鳥資料館古墳壁画室長、石橋飛鳥資料館
学芸室長、栗山企画調整部写真室主任、脇谷埋蔵文化財センター保存
修復科学研究室長、柳田埋蔵文化財センター主任研究員

(オンライン) 箱崎都城発掘調査部部长 ほか

皇居三の丸尚蔵館：建石学芸部長

4. 概要

(1) 開会

(2) 議事

①検討会委員について

- ・座長の指名に基づき、岡林孝作委員が副座長に着任。

②古墳壁画の保存活用について

- ・米村調査官より、「資料2 国宝高松塚古墳壁画及び国宝キトラ古墳壁画の保存活用に関する令和6年度の検討事項」の説明を行った。

森川委員：国営公園と一体的に進めていくことが本格的に始まったことは、明日香村にとって非常にありがたい。「1. 高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称）（新施設）設置について」の「主な検討事項」の7項目のうち、6項目は古墳壁画をどのように安定的に管理し守るかは、もともと古墳壁画を保存するための施設なので当然のことである。地域側としては、どのように公開、活用するかを深めていただきたい。明日香全体を「まるごと博物館」として保存・活用し、住民だけでなく、村外や海外からも来ていただくような施設とソフトの整備を推進している。飛鳥・藤原の世界遺産登録も同様の方向で進めているが、中核となる古墳が幾つもあり、駅の近くにある、この場所の性格からすると、古墳全体あるいは明日香村全体、世界遺産登録を目指す内容全体の説明もできるところであってほしい。今年度は「どのように、どんな内容を誰に見てもらおうか」を深める時期だ。明日香村が県や国と一緒に、センター機能をどうするかを考える上で、新施設がどのようになるかを示してほしい。飲食、冬でも夏でも子供たちが遊べる、勉強できる、楽しめるというような視点からのアプローチが必要だ。また、公園館にはジオラマがあり、来訪者に飛鳥を説明する際にとてもわかりやすい。今まで以上に説明力、表現の仕方が問われると考えている。

和田座長：世界遺産登録を目指す中で、非常に重要な施設の一つになる。保存のための施設はもちろんだが、展示・活用をより積極的にやっていくことを十分考えなければいけない。ワーキング等を設置して内容を深め、飛鳥の重要な遺跡というだけでなく、「東アジアの中でどういう位置を占めているか」も含めて、展示で強調していただきたい。

柳澤委員：当該地区の再整備方針を5月に策定し、新施設設置に合わせて公園館も一体的に

リニューアルをするという位置づけを行った。一方で、国営飛鳥歴史公園事務所の機能の仮移転、現建築物の撤去等の検討が必要になり、早ければ来年度にも仮移転の手続を行うことを目指して、予算調整等を行っている。森川委員のご意見にもあったとおり、再整備方針の大きな柱の一つとして、この地区が飛鳥駅にも近いことから、飛鳥全体のゲートウェイとしての機能強化を盛り込んだ。その観点からも、新施設の展示は、来訪者に飛鳥のことを分かっていたかという観点をもちながら、引き続き文化庁と連携して進めていきたい。

三村委員：「主な検討事項」の最後、運営方法の中に、「コンセッション方式の導入」という文言があるが、民間に運営をしていただくという理解でよろしいか。

米村調査官：建物自体は国が持ち、壁画の保存管理は文化庁が進めるが、民間でも可能な展示運営やサービスの部分など、運営の一部を民間にお願いしたいと考えている。

三村委員：仕事内容でのすみ分けは大事で、森川委員からの指摘があった飲食サービスについては、公で直営するよりも良いアイデアが出てくるのかもしれない。それぞれの長所を生かせるよう、注意が必要だ。

和田座長：多くの組織が関わる施設になるため、国、県、村、民間事業者の其々の役割をしっかりと設定する必要がある。

米村調査官：皆様からのご指摘や、多くの事項についても十分に検討し、有識者、関係者の皆様のご意見とご助言を伺いつつ、公園館の展示内容とも連携して詳細を決めていきたい。基本計画も「体感」ということを強くうたっており、より分かりやすく、体感して自らが学べるような形を目指したい。

和田座長：大阪府の博物館では指定管理者の運営に対して評価委員会等を設置し、毎年、仕事内容のチェックを行っている。そのようなことも含めて検討してほしい。

・廣瀬室長より、「資料3-1 高松塚古墳及びキトラ古墳の保存活用について」の説明を行った。

森川委員：明日香村では、京大の研究室と一緒にメタバース空間づくりに関する勉強会を開催している。明日香村に来た方々に知ってほしいのは、飛鳥時代はどうだったか、昭和の時代はどうだったか、そして今、これからの未来に向けてということだ。古墳時代から飛鳥時代前期、中期、後期で変化した様子を、デジタルデータを使って示せる。こうしたものを国営公園と一緒に分かりやすく説明ができると、新しい概念が出てくるのではないか。飛鳥時代から地形はあまり変わっていない

い。そのようなことも考えて、活用の仕方の将来像を幅広く取っていただきたい。

廣瀬室長：飛鳥時代の地形の復元モデルを、アニメチックではあるが作成している。道路など人工的に改変した場所を補った上で、主要な古墳のモデルを落とし込んでいるが、まだ完成度が低い。現代から1300年タイムスリップするかたちで、当時を再現したCGも準備していく予定もある。明日香村、橿原市、桜井市等が協力するプラットフォームとして相互に連携しながら作っていければと思っている。

小林委員：VRコンテンツは楽しみだ。公開や運用に関して、具体的に教えていただきたい。

廣瀬室長：今年度は現地でタブレットでの見え方を検証する。スマホ等のアプリも検討しているが、アプリのダウンロードにWi-Fi環境が必要になることが課題であるため、当面は解説する人がタブレットを持っていき、それを皆さんに見ていただく試行を通して、問題点の改善・理想的な公開の形を考えていきたい。

・早川室長より、「資料3-2 国宝高松塚古墳壁画及び国宝キトラ古墳壁画のメンテナンス等について」の説明を行った。

成瀬委員：キトラ古墳の「午」に関して、「美術史の専門家と中国における調査及び研究交流会を予定」とあるが、これは主に保存方法に関する事か、あるいは図像的なことも含めているのか。

早川室長：半年前、陝西省西安の古墳壁画の博物館で壁画の修復処置に関する企画展示が開催され、それに関連して壁画の保存修復に関する研究交流会を予定している。

・犬塚班長より、「資料3-3 国宝高松塚古墳壁画及び国宝キトラ古墳壁画の材料調査について」の説明を行った。

成瀬委員：予備的調査でラマン分光分析をするということで、回折のように化合物まで分かるため、色材調査において非常に有効である。その方面を見据えた活用をお願いしたい。これまでに取得した分析データ等も総合して考察するということが、ラマン分光分析のデータが出てからでも遅くはない。もう1点、石材等の運搬に関して、東博で美術品等の移動に関する研究が進んで、成果が上がっていると聞いているが、そちらの連携はどうか。

犬塚班長：これまで取得した分光分析のデータを見て、その後も検討したいと考えているが、ご指摘のようにラマン分光分析を使うと化合物の種類について、さらに違った測定原理から新しい知見が得られると考えている。安全面も含めて、同時並行で検討していきたい。石材の輸送については、東博で研究成果が多く得られており、

担当者と連携する計画を立てているところである。

・「資料3-4 国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設及びキトラ古墳壁画保存管理施設の保存環境について」について、佐藤室長より国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設、脇谷室長よりキトラ古墳壁画保存管理施設の説明を行った。

・米村調査官より、「資料4 国宝キトラ古墳壁画の公開（第31・32回）及び国宝高松塚古墳壁画修理作業室の公開（第45・46回）について」の説明を行った。

和田座長：1日平均で高松塚のほうが約100人少ない理由は何か。

米村調査官：高松塚古墳壁画修理作業室では、1班当たり10名で運用しているのに対して、キトラ古墳壁画保存管施設で1班16名としているため、定員数の違いから来場者数の差が生じたと考えている。

和田座長：施設環境と来場者数とは関係はしないか。

米村調査官：キトラ古墳壁画保存管施設は、展示施設が整備されているので一度に見学できる人数が多い。高松塚古墳壁画修理作業室は、見学通路からの見学であり、感染症を気にされる方もおられ、人が重ならない程度で見学できる人数として、10人が適していると考えている。見学環境により、数字の差があるのは確かだ。

・廣瀬室長より、「参考資料1 令和6年4月1日付奈良文化財研究所の組織改編（概要・組織図）」の説明を行った。

③その他

岡林委員：資料3-2について、中国における調査及び研究交流会の相手方は陝西省考古研究院、陝西考古博物館か。

早川室長：そのとおりである。

佐野委員：これまでの調査研究の蓄積は本当に貴いが、一般には見えにくく、もう少し可視化できるような、学術的な報告書だけではない形での発信の在り方、発信力のスキルとアイデアの工夫が必要ではないか。高松塚壁画を見たいと思ってインターネットで検索しても、出てくるのは文化庁のホームページで「既に申込み期間が終了した」程度の情報しかない。もう少し身近な、今の人々の情報の取得法にも即した形に工夫できるとよい。また、新施設が「どこに、どのように展開していくのか」という、大きなグランドデザインを見ながら考えていく必要がある。例えば、諸外国での類似史跡に関連する公開、見学の在り方についての事例やヒ

ント等についても、もう少し入れていただきたい。例えば、アイルランド中部のロンマクノイズやグレンダロッホ等の公園史跡は、高松塚と時代的にも重なり、歴史的な史跡と現在も維持されている自然とをうまく合わせて多くの人々に見ていただける、国の文化の発信地としてデザインがされており、素敵だと思った。全体的なグランドデザインのプランナーのような方の話は、このような委員会でないとなかなか伺えないので、ぜひお願いしたい。

柳澤（伊）委員：新施設の活用の仕方について、グランドデザイン的なもの、例えば世界遺産にあるようなインタープリテーションの戦略的なものを施設の完成に合わせて作成してほしい。

里中委員：昭和の発見時の話に対して、専門家や学術的な視点で押さえなければいけないことだとは思いますが、民間の人たち、国民や外国人に「この地がどういう地であったか」を理解いただくためには、昭和ではなく飛鳥時代をイメージさせるような施設がもっと必要だ。資料2「主な検討事項」に今後の運営方法として、「委託事業：高松塚新施設コンセッション方式導入検討調査」と記載があるが、民間と手を組むことで、文化庁など公的なところよりも自由度が高まり、民間施設での紹介やYouTube等でも比較的に自由度高く発信できる。子供たちや民間人が興味を持つというのはそのようなところで、私たちと同じ人間という実感から過去に興味を持つよう、民間と大胆に手を結べるとよい。学術面での押さえは大事だが、融通度を高くして、公園としてみんなが楽しめて知的好奇心が満たされ、それをきっかけに、専門家になりたい、歴史に興味を持つ、民族の在り方について若い人たちが考える等のきっかけとなるような楽しい施設ができれば良い。

成瀬委員：ドローンやカメラの性能が非常に発展している現在、航空測量で遺跡、遺構の調査を実施すると、これまで以上に様々な情報を得られる可能性はないか。

廣瀬室長：文化庁の埋蔵文化財部門で検討されている事案である。日本の8割ぐらいの基本的な地形測量のデータが防災対策等においても蓄積されている。そうしたデータを解析すると、今まで立ち入れなかった場所で古墳が発見されている。昨年度、高松塚・キトラで実施した地形測量は、もっと精度の高い点を多く調査したものであり、今後の活用を検討している。

作田課長補佐：第36回検討会の開催は、令和7年2月27日（木）午後、文化庁の京都庁舎内での開催を予定している。

以上